

## 1982 (明治 15) 年の泥雨記事 A Mud Rain Event in 1882

○加納 靖之

○Yasuyuki KANO

A mud rain was observed in February, 1882 across a wide area of Japan's main island. Documents, records, and articles in several newspapers that written at At Osaka, Kyoto, Mie, Gifu, Aichi, Nagano, Tokyo, Chiba, Ibaraki Prefectures and so on are transcribed to characterize the mud rain event. The documents mostly described that something like ash, sand or mud fallen and accumulated. One article described that the night is like the one without moon. The point of observation seems to migrate from west to east in three days. The mud rain estimated to be brought by (1) ash fall from a volcano eruption, (2) Asian dust, or (3) local dust storm.

### 1. はじめに

古文書や古記録、絵図などの史料を解読することにより、過去の地震や自然災害についてデータを得ることができる。これまで、京都大学古地震図書館・博物館が所蔵する史料のうち、弘化四(1847)年善光寺地震や天明三(1783)年の浅間山の噴火に関するものを解読してきた。地震や火山だけでなく、気象あるいは土砂災害についても記録されているが、ここでは明治15年2月下旬に日本各地でみられた泥雨について検討する。なお、明治15年は、近代的な観測体制の整備が緒についた時期であり、公的な記録は今のところ見つからない。

### 2. 泥雨記事の概要

明治15年当時に書かれた日記・随筆(『桜齋随筆』, 『浄慈院日別雑記』)および新聞(『東京日日新聞』, 『東京絵入新聞』, 『郵便報知新聞』, 『三重日報』など)から、泥雨についての記事を採集した。記事がみられた地点は大阪, 京都, 三重, 岐阜, 愛知, 長野, 千葉, 茨城などである(図1)。

記事の多くは、「桜齋随筆」は鹿島神宮の宮司家の第66代鹿島則良の随筆であるが、明治15年2月21日に「泥雨に混じて降り」とし、庭木などに白い灰のようなものが付着したさまを記している。その他の記事でも、「灰」(「焼灰」), 「灰と泥の交じったもの」, 「粉の様な物」, 「黄色の砂」が降り、場所によっては薄く積ったとしており、灰または砂、あるいはそれに類似したものが京都から関東にわたって降ったようである。なかには、「暗黒にて土灰を降らす」というような降下物が

相当の密度をもっていたことを思わせるような記事もみられる。降下が見られた日時をみると、2月20日から22日にかけて、西から東へと降下した地点が推移していくようにみえる。

### 3. 泥雨の原因

泥が降るといふ現象があったとき、その原因としてまず考えられるのは火山灰か黄砂である。この時期に火山灰を降らせるような火山噴火は記録されていない。過去50年の記録をみれば、鹿島に近い銚子でも黄砂の見られた例はあり、黄砂の可能性はじゅうぶんにありえる。局地的な砂塵現象ということも考えられるが、記事の見られた地点は広範囲にわたっており、大気中にただよう灰あるいは砂の微粒子が降ったものと考えられる。現時点では原因を特定するには情報が不足しているが、黄砂の可能性が高い。

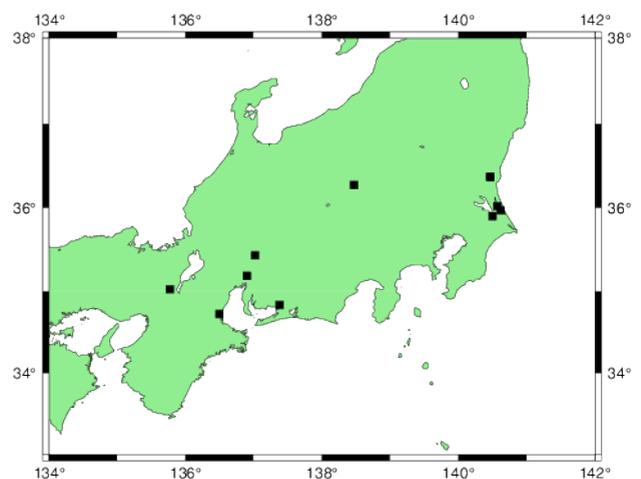


図. 泥雨に関する記事の見られた地点の分布。

